

二つの展覧会カタログに寄稿して

生活芸術科 村田 宏

昨年度、筆者は二つの展覧会カタログに次の論考を寄稿する機会を与えられた。

1. 『『バレエ・リュス』再考—そのオリエンタリズムとモダニズム』(1998年10月『美術と演劇：ロシア・アヴァンギャルドと舞台芸術1900-1930—ロバーノフ・ロストフスキー・コレクション』横浜美術館, 26-32頁)。

2. 「ピカソと古典的精神の復活—《海辺を走る二人の女》(1922)とその時代」(1999年3月『パリ・国立美術館所蔵ピカソ展』上野の森美術館, 208-218頁)。

最初の『『バレエ・リュス』再考—そのオリエンタリズムとモダニズム』は、ディアギレフ率いる「バレエ・リュス(ロシア・バレエ)」をめぐる筆者固有の問題意識に発する考察である。もとより、バレエ自体は、演劇史、もしくは身体芸術史とも言うべき学問領域に属する芸術分野であるが、他方で、バレエ成立に不可欠な舞台装置や衣裳デザインが広く美術史学の研究対象になりうるとすれば、ロシア・バレエに関わった様々な美術家たちの装置やデザインの再検討を通して、「バレエ・リュス」に新たな視角を開こうとすることが、必ずしも他の専門分野への、いわば越境行為に等しい無謀な企てとならないことは自明であろう。

拙論の要旨は、三点にまとめられる。①ロシアにおける演劇デザインの革新とバレエの隆盛、②「バレエ・リュス」のオリエンタリズム—ジェンダーの転倒とフェミニズム、③「バレエ・リュス」のモダニズム—ロシア・アヴァンギャルドとの類似、である。このうち、②は、オリエンタリズム(東方趣味)が明確に見て取れる「バレエ・リュス」の上演作品において、しばしば、男女の性差の逆転、すなわちジェンダーの転倒が見られるという事実に着目し、それが、男根中心主義(ファロセントリズム)を転倒させる「邪悪な女」、つまりは、男性中心の支配原理に異議を唱える「新しき女」の造形化に結びついていたことを、レオン・バクストの衣裳デザインや両性具有的なダンサー、ニジンスキーの特質を手がかりに解明しようとしたものである。

ここで委細は尽くせないものの、筆者は拙稿において、「バレエ・リュス」が、想像のオリエンタリズムとダンスの混交の中に男根中心主義からの離脱を使喚するジェンダー転倒の胚芽を宿しつつ、かつバレエ史上最初のテニス・プレイヤーを造形化(《遊戯》1913)しながらロシア・アヴァンギャルドに通底するという、いわばヤスス的な両義的存在として「最後のオリエンタリスト」であると同時に「最初のモダニスト」たる運命を生きた、という最終的な結論を導き出すことになった。

二番目の「ピカソと古典的精神の復活—《海辺を走る二人の女》（1922）とその時代」は、①デ・キリコとセヴェリーニの古典的傾向、②ピカソの古典的傾向、③ピカソ作《海辺を走る二人の女》（1922）の三章からなり、ジョルジョ・デ・キリコ、ジノ・セヴェリーニ、パブロ・ピカソといった一連の画家たちが、第一次大戦中から大戦後まで、あたかも戦前の前衛的な諸運動への反動でもあるかのように、キュビズム、あるいは未来派のスタイルを捨て、伝統的な表現様式に回帰していったという現象に焦点を合わせ、主としてピカソの作品《海辺を走る二人の女》の制作の背景を解き明かしつつ、ピカソらの創造の導きの系になったのが、結局ところ、「歴史への思惟」（美術史的に言えば「古典主義」）、詩人ジャン・コクトーの言葉を用いれば、「秩序への回帰」であったことを跡付けたものである。あわせて、こうした「秩序への回帰」が本格的な美術史研究の対象とされるようになったのが、比較的近年のことに過ぎないことも指摘しておいた。この研究立ち遅れの理由として、一つには、フォーヴィズム、キュビズム、抽象絵画といった革命的な美術運動が、かつてない国際的な規模で相次いで叢生し、絵画の枠組に重大な変質をもたらした第一次大戦前の美術状況に引き比べ、大戦後の古典主義の復活が、後世の眼には、いかにも奇妙な断絶、あるいは逸脱と映っていたということ。二つには、偉大な過去の伝統に回帰するという古典主義が、意図せざることとはいえ、危険な復古主義の登場を準備するものであったということが考えられることも拙論末尾で触れておいた。

高踏的で難解なモダニズムとは違って、古典主義は本来的に明快であり、人々の承認と受容をやすやすと手に入れることができ、たとえばファシストが政治宣伝を目的として古典主義を利用する時、それは、党派的なプロパガンダの強力な兵器庫に成り代わるのである。こうしたイデオロギー的悪夢を主たる理由に、第一次大戦後の「秩序への回帰」は、激しい疑惑と否定の対象とされ、復古主義的な衰微と頹廢の徴候として歴史の余白に追いやられてきたのであるが、しかし、古典的で端正な佇まいを見せる大戦後の美術を、いわば硬直したイデオロギーの所産として片づけるだけでは不十分、というよりも不正確であることに人々は漸く気づき始めたのである。歴史的思考に浸された古典主義は、まさに歴史的思考の客体として冷静に対象化される再評価の季節を迎えているというわけである。「ピカソと古典的精神の復活—《海辺を走る二人の女》（1922）とその時代」と題する本稿は、結果として、そうした問題把握についての一つのケース・スタディになったと言えよう。